

## 音楽を形づくっている要素と曲想とを関連付ける学習

第6学年における「木星」の鑑賞における音階の特徴を感じ取る学習を通して

The learning to understand combined musical elements and pieces with emotion and imagination,

Perceiving characteristics of scale in the class of appraising "Jupiter" by student grade 6

飯泉正人(牛久市立向台小学校)

Masato IIZUMI (Mukoudai Elementary School of Ushiku City)

(要旨)

小学校学習指導要領(平成29年告示)では、音楽科の目標が「音楽的な見方・考え方」という言葉を使って示させることとなった。小学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編には、「音楽的な見方・考え方とは『音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること』であると考えられる。」と書かれている。

教育芸術社の教科書「小学生の音楽6」には、ホルスト作曲の「木星」が掲載され、オーケストラのひびきを味わったり、4種の旋律が代わる代わる登場する面白さを味わったりする鑑賞教材となっている。中間部のゆったりとした4分の3拍子の旋律は特に有名だが、筆者はこの旋律を生み出している独特な音階に着目し、音階が生み出す旋律の特徴と、特徴が生み出す曲想との関わりを児童らに感じ取らせたいと考えた。この音階は第四音がない6音階である。第七音が演奏される回数が約半数であることを考えれば5.5音階なのである。第4学年と第5学年で日本音階として5音階による音楽づくりなどを経験している6年生児童に、この旋律が日本音階に近い5.5音階であることに気づく学習活動をさせることで、音階という音楽を形づくっている要素と曲想との関わりを感じ取らせ、この曲のよさを深く味わわせたいと考えた。

課題提示の工夫、聴取部分の限定、発問の精選、教具の工夫などにより、本実践に一定の成果はあったと考える。しかし、それとともに見えてきたのが、筆者とは大きく異なる、児童を取り巻く音楽環境(旋律環境)であった。我々音楽教師が、音楽で児童とコミュニケーションを取るうえで、踏まえなければならないものも見えてきた。

(キーワード)

音楽を形づくっている要素、曲想、関連付け、音階、旋律

### 1. 研究の背景

#### (1) 学習指導要領

小学校学習指導要領第2章第6節音楽目標では

「曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。」ことが示されている。第5学年及び第6学年共通事項(1)アでは「音楽

を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えること。」が示されている。公立小学校に勤務する筆者は、音楽の指導を行う上で、これらの事項は特に重要であると考え。これを踏まえて楽曲と接したならば、その楽曲がより身近な楽曲と変わるからである。

現代は音楽が溢れた時代である。子どもたちの家庭でも、テレビなどのメディアからは絶えず音楽が聞こえている上、ネット上からも様々な形で音楽が提供されてくる。地域社会の中でも、無意識に聴いている音楽がどれほどあるか計り知れない。そんな、数えきれないほどの回数を無意識に聴いた楽曲でも、曲想と楽曲の構造などの関わりや、音楽を形づくっている要素の働きなどを発見したならば、一度聴くだけで忘れられない楽曲となる。つまり、音楽は、児童にとってより楽しめる音楽、自分にとって大切な音楽に変わるのである。

## (2) 研究の対象

本研究の対象は、勤務校（小学校）6学年3学級とした。対象とした理由は筆者が6学年全学級の授業を担当しているからである。

学校名 茨城県牛久市立向台小学校

児童数 604 学級数25（特別支援5学級含む）

第6学年 101名（3学級）

## (3) 第6学年における「木星」の鑑賞

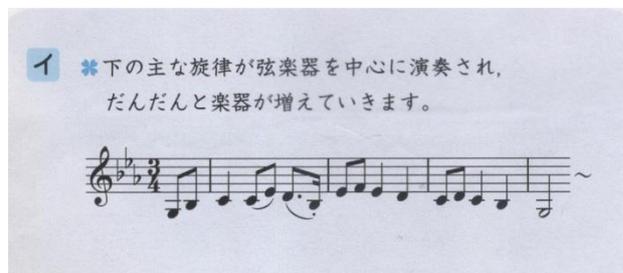
本校は、音楽の教科書として教育芸術社の「小学生の音楽」を使用している。児童の実態や学校行事に合わせて調整はするものの、題材や指導計画は各学年ともおおたの教科書に沿って指導を行っている。

第6学年の「小学生の音楽6」では鑑賞教材として「木星」が掲載されている。この曲は、イギリスの作曲家グスターヴ・ホルストの作品で、全7曲からなる管弦楽組曲「惑星」の第4曲である。中間部の4分の3拍子の旋律は、TVなどのメディアや歌唱

曲を通して広く知られている。教科書の掲載ページには、曲の主な旋律として「ア」の3つの旋律（①4分の2拍子 ②4分の2拍子 ③4分の3拍子）と「イ」の旋律（ゆったりとした4分の3拍子）の楽譜が添えられている。教科書では「いろいろな音のひびきを味わおう」という題材でこの曲を取り上げており、ページ冒頭に大きく書かれる学習目標は「オーケストラのひびきを味わいながらききましょう。」となっているが、オーケストラの楽器の音色のみならず、拍子やテンポの異なったいくつかの旋律が入れ替わるおもしろさにも着目しやすくように掲載されている。



教育芸術社「小学生の音楽6」P16～17（資料1）



「イ」の旋律（資料2）

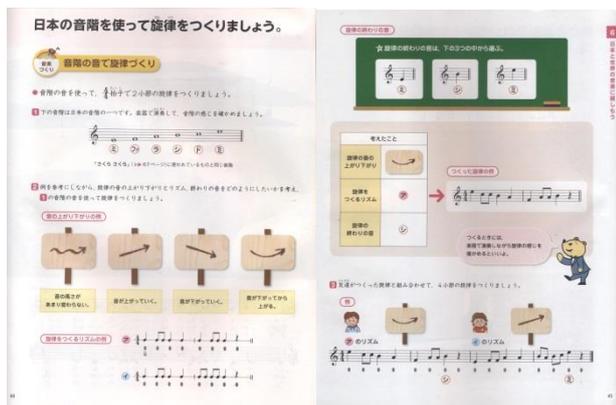
## (4) 第4学年および第5学年における日本の音階の学習

一方、当教科書では、6年間を通して日本の音楽に親しむ題材が設定されている。第4学年では、「日本の音楽に親しもう」という題材で、「こきりこ」、「さくらさくら」などを表現の教材楽曲として取り上げている。また、旋律づくりとして「5つの音（ミ、ソ、ラ、ド、レ）で、おはやしのせんりつをつくりましょう。」という活動がある。



教育芸術社「小学生の音楽4」P48～49(資料3)

また、第5学年では、「日本と世界の音楽に親しもう」という題材で、「春の海」や「声による世界の国々の音楽」が鑑賞教材として取り上げられ、「こもり歌」が表現教材として扱われている。旋律づくりとしては「日本の音階(ミ、ファ、ラ、シ、ド)を使って旋律をつくりましょう。」という活動がある。歌唱教材としての「子もり歌」においては、この歌を律音階と都節音階の二種の音階で歌い、地域によって歌われる旋律(音階)に違いがあることも学習する。



教育芸術社「小学生の音楽5」P44～45(資料4)

(5) 本研究のねらい

(3) で述べたように「木星」の「イ」の旋律は、TVなどのメディアや歌唱曲を通して広く知られているが、この旋律が醸し出す民謡風な雰囲気の原因は音階にあると考える。この旋律には第4音(ファ)

がない。更に第7音(シ)が演奏される回数は他の音(ド、レ、ミ、ソ、ラ)に対し半数である。7音階や5音階という尺度で言えば、つまりこの旋律は5.5音階である。

6年生児童は、4年生と5年生とで日本の音階を学習し、5音階(「ミ、ソ、ラ、ド、レ」や「ミ、ファ、ラ、シ、ド」)で旋律づくりの経験もある。教科書の題材「オーケストラのひびきを味わいながら聴く」学習の前段階の鑑賞の活動として、「イ」の旋律を構成している音階は、西洋的な雰囲気(7音階のしくみ)と日本的な雰囲気(5音階のしくみ)が融合していることに気づかせ、音階が曲想と密接に関わり合っていることを感じ取らせたいと考えた。

2. 研究の手立て

(1) 旋律に着目して聴く

児童は聴いた楽曲に対して、音楽を形づくっている要素の様々なものを同時に聴き取っている。だからこそ、その都度、学習課題にする要素について焦点化させることが重要である。今回は、イの旋律(旋律の音階)に焦点化させるため、イの旋律部分の初め16小節のみを使用する。

(2) 旋律が5音階的要素を含んでいることに気づく

① 旋律が生み出す雰囲気を感じ取る

旋律が5音階的要素を含んでいることについて児童自らの気づきを促すために、旋律を聴いて感じ取った雰囲気をワークシートに書く活動を取り入れる。初めはワークシートを配布せず、旋律を聴かせた直後、「どんな感じがする?」と問いかけ、「テレビドラマで聴いた気がする」や「ジブリ映画のよう」などの率直な気持ちを聞き出し、それを共有しながらワークシートへ書くことの方角性を示す。ワークシートを配布後は、友だちと思いいい対話をしながら考えを記述できるようなグループ活動を行い、頃合いを見て、ワークシートへ記述したことを全体で共有する。

② 音階構成音への着目

次に、このような雰囲気を感じさせる音楽をか

たちづくっている要素は何であるかを考えられるように「この旋律を特徴づけているものはなんだろう。」と課題提示し、グループ活動で話し合い、その後全体で共有する。共有していく中で「だんだん盛り上がっていくところ」などの発言があった場合は、それは表現の仕方であり、旋律の特徴と区別していくように助言する。

頃合いを見て旋律譜を配布する。



旋律譜（資料5）

旋律譜はハ長調に移調し階名をふったものを用意する。旋律譜を手がかりに、グループの友だちと話し合う活動を通して、「ファがない！」ということに気付かせる。

### (3) 旋律が5音階的要素を含んでいること確かめ

#### ①音階の各音が何回使われているかを数える

音階の各音（ド～シ）がそれぞれ何回使われているかを数え、ワークシート裏にメモさせる。(2)の活動中に、もし、児童から「ファがない！」という発言が出たなら、そのタイミングで行う。この場面はグループ活動を行っているので、7つの音を友だちと分担して数えるなどグルークで協働することを促す。

#### ②音階の各音が使われた回数を確認する

次に、音階の各音（ド～シ）がそれぞれ何回使われてたかを、児童の発表を聞いて板書するなどしながら確認する。ここで、「ファ」がないことや「シ」が他の約半分の回数しか使われていないことに着目させ、この旋律は5音階で成り立っ

ていることに気づかせる。

### (4) 5音階的であることの理解

4年生や5年生で学習した日本の音楽が5音階であったことを取り上げたり、西洋の7音階と比較させたりしながら、この旋律の音階の特徴についておさえさせる。教師の鍵盤楽器演奏により、原曲と5音階での演奏（シの音まで抜いてしまう）を聴くなどして、この曲の音階の特徴における日本的なもの

と西洋的なものとの融合を感じ取れるようにしたい。鍵盤楽器は、和楽器（三味線）などの音色が出せるものを使用し、音色を洋楽器（ストリングス）→和楽器（三味線）と変化させ比較できるようにし、この旋律の音階が日本的なものを含んでいることを理解しやすいようにする。

## 3. 授業の実践

### (1) 指導と評価の計画

時	活動内容	評価規準
第1時 (本時)	旋律の特徴や雰囲気を感じ取る。	音階を構成する音に着目して、旋律の特徴や旋律が生み出す雰囲気を感じ取り、そのよさを味わっている。
第2時	・旋律や旋律の拍子に変化する面白さを感じ取る。	・旋律の変化、拍子の違い、オーケストラの楽器の音色や音色の重なり合いを聴き取り、それらが生み出すよさや面白さを感じ取っている。
第3時	・オーケストラの楽器の音色や音色と音色の重なり合いを味わう。	・この曲のよさを自分なりに見出しながら聴いている。

(資料6)

### (2) 本時の目標

音階を構成する音に着目した旋律の特徴と、特徴が生み出す曲想を感じ取り、そのよさを味わっている。

### (3) 準備物

- ①音源 (CD, MP3 ファイル)
- ②オーディオ機器
- ③ワークシート
- ④旋律譜
- ⑤キーボード (ストリングスと三味線の音)

(4)展開

(資料7)

学習活動・内容	教師の支援
1 旋律を聴いて感じ取った雰囲気をワークシートに書く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イの旋律部分を16小節間聴く。</li> <li>・数名の児童に発言させるなどし、ワークシート記述の仕方の方向性を示す。</li> <li>・友だちと話し合いながら記述できるようグループ活動で行う。</li> <li>・和やかな雰囲気をつくり自由に記述できるようにする。</li> </ul>
2 本時の課題をつかむ。 この旋律を特徴づけているものはなんだろう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2～3名の児童に発表させ、意見を共有する。</li> <li>・このような雰囲気を感じさせる「音楽をかたちづいている要素」は何であるかを考えられるように課題提示する。</li> </ul>
3 旋律の特徴づけている要素について考える。 (1) グループで話し合う (2) 旋律譜を見る。 (3) 階名唱する。 (4) 音階の7音(ド～シ)はそれぞれ何回使われるかを数える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループで話し合っている中、イの旋律部分16小節間を1～2回再生する。</li> <li>・数名の児童に意見を発表させ全体で共有する。</li> <li>・「盛り上がっていく」などは、表現の仕方であり、旋律の特徴と区別できるよう助言する。</li> <li>・階名のふつである旋律譜を見ながら話し合い、気づいたことを話し合う。</li> <li>・階名唱する。</li> <li>・音階の各音(ド～シ)がそれぞれ何回使われているかを数え、ワークシート裏にメモさせる。</li> <li>・7つの音を友だちと分担して数えるなどグループで協働することを促す。</li> <li>・児童の発表をもとに板書するなどし、各音の回数を確認する。</li> <li>・「ファ」がないことや「シ」が他の約半分の回数しか使われていないことに着目させ、イの旋律は5、5音階で成り立っていることに気づかせる。</li> </ul>
4 音階と曲想との関連について考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4年生や5年生で学習した日本の音楽が5音階であったことを取り上げたり、西洋の7音階と比較させたりしながら、この旋律の音階の特徴についておさえさせる。</li> <li>・教師の鍵盤楽器演奏により、原曲と5音階での演奏(シの音まで抜いてしまう)を聴くなどして、この曲の音階の特徴における日本的なものと西洋的なものの融合を感じ取れるようにする。</li> <li>・鍵盤楽器は、和楽器(三味線)などの音色が出せるものを使用し、音色を洋楽器(ストリングス)一和楽器(三味線)と変化させ比較できるようにし、この旋律の音階が日本的なものを含んでいることを理解しやすいようにする。</li> </ul>
5 本時の学習で感じたことやわかったことをワークシートに書く。	<p>音階を構成する音に着目した旋律の特徴と、特徴が生み出す曲想を感じ取り、そのよさを味わっている。(ワークシート・児童の様子)</p>

5. 各活動の詳細

(1) 旋律を聴いて感じ取った雰囲気をワークシートに書く。

①活動の目的

本時の目標は「音階を構成する音に着目した旋律の特徴と、特徴が生み出す曲想を感じ取り、そのよさを味わっている。」である。本時の中心となる活動は「音階を構成する音に着目した旋律の特徴」をつかむことである。本時の最初に、この旋律から自分はどうのような雰囲気を感じているのか。友だちはどのような雰囲気を感じているのか。というように、旋律を曲想という視点でとらえることがこの活動の目的である。つまり、「音階を構成する音に着目した旋律の特徴」をつかむという中心活動のための予備活動である。

②活動の方法

旋律を聴いて感じ取った雰囲気をワークシート

に書く。初めはワークシートも配布する前に、旋律を聴かせた直後ぶしつけに「どんな感じがする？」と問いかけ、児童の率直な意見を引き出ししながら、ワークシート記述の仕方の方向性を示し、その後、グループで話し合いながらそれぞれ個人のワークシートに記述させた。その後、記述した意見のうち数名のものを発表させ全体で共有した。

③活動の結果

旋律を聴かせた直後ぶしつけに「どんな感じがする？」との発問に対して児童は、「ジブリ映画のようだ」「『もののけ姫』のようだ」「広いところに一人で立っている感じ」「なんか悲し感じ」など幅広い発言があった。同時に、演奏している楽器名を答える児童もいたため、それによって生じる雰囲気(曲想)へ着目するように助言した。これらの発言を受け、「そういうふうに、感じたことや想像したことを書いてみよう」と、ワークシートへの記述をさせたところ、さらに幅広い意見が書かれた。この詳細は考察で述べる。

(2) 本時の課題をつかむ。

児童がとらえた「旋律から生じる曲想」を受けて「この旋律を特徴づけているものはなんだろう。」という課題を提示することで本時の中心となる活動内容をとらえさせ、このような雰囲気を感じさせる「音楽をかたちづいている要素」は何であるかを考えさせた。

(3) 旋律の特徴づけている要素について考える。

①活動の目的

この活動の目的は、旋律が5音階的要素を含んでいることへの気づきを促し、そのことをたしかめることである。

②活動の方法

次のような手順を踏んだ活動とした。

ア グループで話し合う

イ 旋律譜を見る

ウ 階名唱する

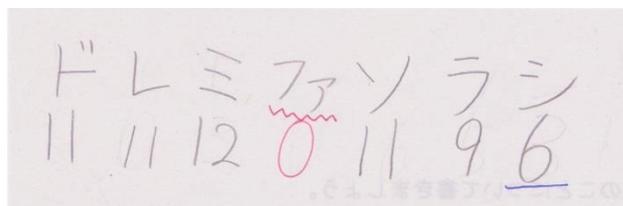
エ 音階の7音(ド～シ)はそれぞれ何回使われるかを数える

③活動の結果

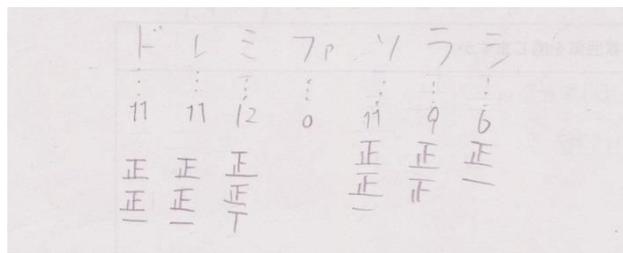
資料なしに、聴くだけで（グループで）話し合っている段階では、具体的な意見はほとんど出なかった。その後階名のふられた旋律譜を見ながら話し合う段階で、学級によって「ファがない！」とつぶやく児童もいたが、それにも気づけない学級もあった。気づけない場合には、階名唱を取り入れた。しかし、これによって新たな意見が出たり、話し合いが進展したりすることはなかった。その後、音階の7音（ド～シ）はそれぞれ何回使われるかを数える活動を行った。グループ内で分担などし、協力し合うことを促したが、これは、グループの児童どうし交流させる効果もあった。こうして、ド～シ各音の回数を表に書くと一目瞭然となり、7音のうち、ファは一度も出てこないこと、シは他の音の約半数しか出てこないことがはっきりわかった。



マーカーを使って数えた児童の旋律譜(資料10)



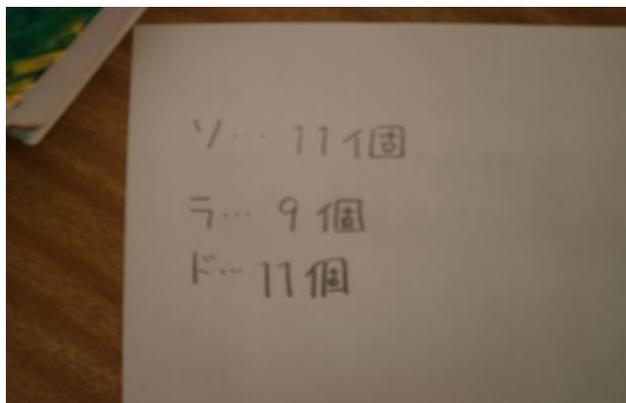
各音の回数を書いたメモ(資料11)



各音の回数を正の字にして数えたメモ(資料12)



音階の7音がそれぞれ何回使われるかを数えるグループ活動(資料8)



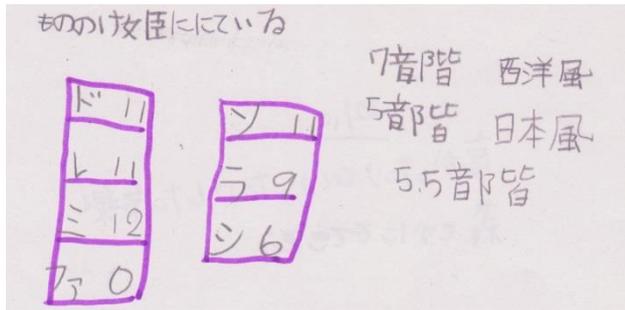
グループで分担し合って数えた児童のメモ(資料9)

(4)音階と曲想との関連について考える。

①ファがない、シが少ないことの意味を知る

(3)までの活動で、この旋律にはファがないことやシが少ないことを確かめた。(4)は、このことにどのような意味があるのか、このことがどのような効果をもたらすのかということについて考える活動である。まず、第4学年、第5学年で学習した「ミ、ソ、ラ、ド、レ」や「ミ、ファ、ラ、シ、ド」という音階を取り上げ、7音階と比較しながら教師の鍵盤楽器演奏を聴き、5音階の雰囲気をつかませた。5音階の演奏を聴くと、確

かにそこには日本的な雰囲気が生まれることを児童は感じ取った。



(資料 13)

②音階を変えて聴く

教師の鍵盤楽器演奏は、次に、「イ」の旋律を原曲のまま演奏、続いて完全に5音階にして演奏(シの音まで抜いてしまう)した。これを聴き児童は、この曲の音階の特徴における日本的なものや西洋的なものが融合していることを感じ取れるようにした。

完全な5音階にしての演奏 (資料14)  
ストリングスで、次に三味線の音色で



②音色を変えて聴く

教師の鍵盤楽器演奏は、和楽器(三味線や尺八)の音色が出せる楽器を使用した。音色を、原曲に近い弦楽合奏音(ストリングス)から三味線に変化させ、音色の比較ができるようにし、この旋律と三味線音との違和感のなさを感じ取らせる。それにより、音階が日本的なものを十分含んでいることを感じ取れた。

③リズムを変えて聴く

その後さらに、三味線音のまま、リズムを日本の舞踊風(8分の9拍子)に変化させ、より日本の雰囲気を強くして聴かせた。児童からは「もうまったく日本じゃん!」などの声があがった。

完全な5音階にし、リズムを変化させての演奏



(資料 15)

(5)本時の学習で感じたことやわかったことをワークシートに書く。

これについては考察で詳細に述べる。

6. 考察

(1)本時の目標に対する児童の振り返り

本時の目標「音階を構成する音に着目した旋律の特徴と、特徴が生み出す曲想を感じ取り、そのよさを味わっている。」に、児童はどれだけ迫れたかを分析するために、活動の「(5) 本時の学習で感じたことやわかったことをワークシートに書く。」における児童の記述を、記述された音楽を形づくる要素で分類し集計した。

音楽を形づくっている要素と曲想との関わりについての記述の分類  
本授業のワークシート「感じたことやわかったこと」(複数記述可)の記述から

番号	分類	記述例	人数
1	音階と曲想との関わりについて書いている	音階によって違った国の音楽に感じる。	59
		音階によって印象がちがう。 一音少なくして演奏するだけで音楽が変わっていくことがわかった。 5音階は日本風なんだとわかった。	
2	和楽器、洋楽器の違いと曲想との関わりについて書いている	洋の楽器で演奏しても和の楽器で演奏しても違和感がない。	14
		洋の楽器で演奏すると洋の曲、和の楽器で演奏すると和の曲に聞こえるから不思議だ。	
3	リズムと曲想との関わりについて書いている	リズムを変えるとまったく別の曲みたいになる。	12
4	曲想についてのみ書いている	この曲が日本風なところがあるとわかった。 日本の曲と言われても外国の曲と言われても違和感がない。	11
5	その他		31

ワークシート提出者 101名 記述事項数合計 127 (資料 16)

この集計は複数回答も含めているが、実際二つ以上の要素について書いた児童は少なかった。ワークシート提出児童101名の内59名が音階についての記述に及んでおり、それらは、どれも音階と曲想との関わりについて述べていた。これは本時の目標

が達成できた部分であると考え。

音階以外の要素を書いた児童もいた。和楽器、洋楽器の違いと曲想との関わりについて書いているものが14、リズムと曲想との関わりについて書いているものが12あった。目標の「音階」とは別方向であるが、なるほどと思える記述であった。この児童らは、活動の「(4)音階と曲想との関連について考える。」において教師がキーボードで行った音階や音色、リズムを変化させての演奏が印象強かったのかもしれない。ならば、キーボード演奏をなくし、この児童たちも音階について書けるようにすべきなのだろうか、また、キーボード演奏なしにすれば、この児童らも音階に焦点化した記述ができたであろうか。授業中の児童たちを見ていると、そうも言えない。そのうえ、音階について書けた児童らの言葉から、キーボード演奏を聴いて「音階と曲想の関わり」を多く感じたことがわかる。音階が生み出す雰囲気について、音で聴いて感じ取ることはやはり重要で、キーボード演奏による解説は大きな効果があったものと考え。

### (2) 旋律に着目する上での音色や強弱の影響

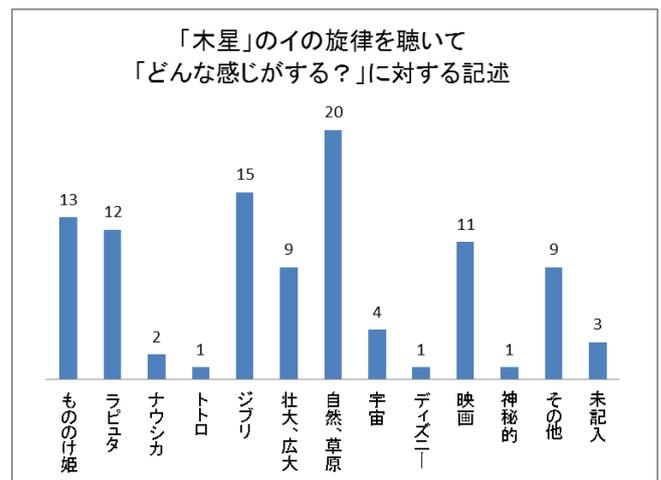
本時の学習活動は、旋律に着目して行う活動であるが、(1)の「旋律を聴いて感じ取った雰囲気をワークシートに書く」活動や、(3)の「旋律の特徴づけている要素について考える。」活動において、「この旋律をとくちょうづけているものはなんだろう」という発問に対して、演奏している楽器のことや強弱に関することを述べる児童がいた。聴いた楽曲に対して、音楽を形づくっている要素のうち複数を同時に聴き取ることは常である。だからこそ、本来の学習活動に十分な時間を確保し、学びを深めるために要素の焦点化が重要になる。課題提示として旋律を聴かせる際、今回は原曲のオーケストラ演奏の音源を使ったが、これをピアノ演奏で行い、強弱などの表現を必要以上に感じさせないようにするなど、検討が必要である。

### (3) 音階から日本らしさを感じ取る能力から見た児童の実態把握と今後の指導の課題

本研究で、目標とは別な角度で見えてきた課題が、日本音階の旋律に日本らしさを感じ取れる感性を児童に育てていかなければならないということであった。

本授業の実践は「この旋律を特徴づけているものはなんだろう。」という課題で行った。この課題への準備段階として(1)「旋律を聴いて感じ取った雰囲気をワークシートに書く。」を行った。ここでは、「少しでも日本の民謡のような感じがする」などの、なんらかの「日本的なもの」を感じとらせ、それを動機づけに課題に入っていけることを予想していた。しかし、ここで「日本的なもの」を発言したり書いたりする児童はいなかった。唯一、日本を舞台にした映画を挙げ「『もののけ姫』のようだ。」という意見があったのみであった。旋律から日本的なものを感じとらせ、音階に着目さえるという動機づけは成立しなかったと言える。

そこで、(1)「旋律を聴いて感じ取った雰囲気をワークシートに書く。」での記述、つまり「どんな感じがする？」に対する記述を集計した。児童が直感的にどう感じたかに焦点化するために、一人1キーボードで見て、複数記述があったものは、最初(最上段)に書かれているもののみを集計した。



(資料 17)

ここでの児童の記述は、予想した「日本の民謡のような感じ」などはなく、多くが視聴体験のある映画の題名、ついで「自然」「壮大さ」などで、「もの

のけ姫」などの日本を題材にした映画を挙げた児童でも101人中13人であった。本校の6年生児童は、予想したほど、「木星」の「イ」の旋律に日本的なものは感じなかったということがわかった。

5音階の旋律は洋の東西、ジャンルを問わず世界中に存在している。まして、「イ」の旋律のような「5音階風」の旋律は、印象派以降のクラシック音楽、ジャズ、ポップス（特にテクノポップ以降）などに、今や当たり前のように存在している。児童がよく耳にするポップ音楽の中にも実に多く存在している。

「5音階風」の旋律の例として、本校児童が歌ったり踊ったりして楽しんでいた曲をJポップから星野源の「恋」、外国のポップ音楽からテイラー・スウィフトの「シェイク・イット・オフ」を例に挙げる。

Original Key A major

恋

星野源

星野源



(資料 18)

Shake it off

Taylor Swift

Taylor Swift

Max Martin

Shellback



(資料 19)

児童をとりまく「旋律環境」がこのような状況の中、さらに輪をかけ児童らは日本の伝統的な音楽を聴く機会が急速に減っている。「そうらん節」や「さくらさくら」など、和楽器による演奏で明らかに日本のものと認知した上で聴かなければ、音階が洋風

なのか和風なのかという視点で楽曲を聴かないということがわかったのである。音楽科の指導においても、表現と鑑賞の活動を通して、積極的に機会を設けて、5音階のよさや面白さ、美しさに気づかせるとともに、5音階は日本の伝統的な音階であることを教えていく必要があると考える。

本実践の課題提示方の検討とするならば、明らかに西洋風な楽曲（7音階の旋律）と、「そうらん節」や「さくらさくら」など、明らかに日本風と感じられる楽曲（5音階の旋律）を提示した後に、「これはどちらのタイプに感じますか。」と「木星」のテーマを聴かせる（いずれもピアノ演奏で）などが考えられる。

<文献>

文部科学省：『小学校学習指導要領（平成29年告示）』

文部科学省：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説』

教育芸術社：小学生の音楽4

教育芸術社：小学生の音楽5

教育芸術社：小学生の音楽6

教育芸術社：小学生の音楽4研究編

教育芸術社：小学生の音楽5研究編

教育芸術社：小学生の音楽6研究編

小鍛冶邦隆：「ホルスト 組曲 『惑星』解説」（スコア）音楽之友社